

「二つの死」井上隆晶牧師

ローマ 6 章 19～23 節、ヨハネ 8 章 42～47 節

①【神のいない世界を死と呼ぶ】

今年は戦後 80 年を迎えます。8 月は特に戦争について思い起こす時です。8 月 6 日には広島に、9 日には長崎に原爆が落とされました。原爆で亡くなった人の死を悼み、多くの人の犠牲によって平和が与えられたことを思い、平和のために黙祷を捧げたいと思います。

私たちは今日、永眠された故人を記憶するために礼拝をささげます。彼らは皆、この世に生きて、時が来て死んで行きました。やがて私たちもいつか死に、彼らの列に連なります。死とは何でしょう。一般の人は、死というものを単に生理的現象として捉えています。老化や病気や事故や戦争や災害などによって肉体が破壊され、呼吸が止まり、心臓が止まる事が死だと思っています。しかしキリスト教では、死とは罪の報いであると教えます。「罪が支払う報酬は死です。」（ローマ 6：23）とあります。罪を犯す人は、生理的に生きていても死んでいるのです。人間は死ぬ運命にあり、生まれた時から死相を持っています。それは人間が罪を犯すからです。このように死には、生理的な死と宗教的な死との二つの死があること知らなければなりません。

●先月、あるキリスト教徒の方の葬儀に出席しました。先々月は、聖公会の葬儀に出席しました。永眠されたのは司祭でしたから、説教者は故人の生前の立派な働きやお人柄などを丁寧にお話しされました。ただ、故人の生前の立派な働きやお人柄や思い出話しならば、仏教でも神道でも無宗教の葬儀でも話されます。もしキリスト教葬儀がそれだけなら、他の宗教と何ら変わらないものとなるのです。キリスト教葬儀しかないものとは何でしょう。それは「神」です。神の目で死を見つめ、死を語るということです。そうでないと目先の生理的な死に感情が飲み込まれて、悲しみに押しつぶされ希望を失うからです。「今日の葬儀は神を感じなかった、人の話ばかりだった」と思うことがたびたびあるのです。それだけ生理的死でしか死を見れなくなって来ているという事です。

旧約聖書によれば、神は人間を創造した後、こう言われました。「善悪知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」（創世記 2：17）しかし、悪魔は人間を騙し「決して死ぬことはない。それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだ。」（同 3：5）と真逆のことを言います。そこで悪魔の言葉を信じた人間は善悪知識の木の実を取って食べ、死が始まったのです。ただし、すぐに死んだのではなく、まず魂が先に死に、魂と一体である肉体にも死が及んだのです。悪魔の目的ははっきりしています。それは人間を破壊し、殺すことです。それゆえイエス様は「悪魔は最初から人殺しであって、真理をよりどころとしていない。彼の内には真理がないからだ。」（ヨ

ハネ 8 : 44) と言われたのです。

ばかばかしい、こんな非科学的なことを信じられるか、これは古代人が書いた神話だと思えるかもしれません。確かに神話の形で書かれています。善悪知識の木の実を食べるという比喩的表現をもって、知識や科学技術を手に入れた人間は、神を恐れず、神を必要としない生き方を始めた、それが死であるということを教えようとしているのです。人間が必要としているのは神ではなく、この世の資源、お金と知識、長生きするための医療の発展と技術です。それを手に入れるために競争し、戦争を起こします。今の社会を見てください。誰もかれも神の声を聞きません。誰もかれも神を無視して企みます。(イザヤ 30 : 1) それはまさに悪魔が作ろうとした神のいない世界です。人間は悪魔の声を聞き、それを信じる悪魔の子になったのです。イエス様がユダヤ人に「あなたがたは悪魔の子」と言ったのはそういう訳です。それがこの世の隅々まで浸透しています。これから人間の罪によって戦争は繰り返され、自然災害はひどくなり、新しい疫病は現れ、天地はやがて人間の罪によって滅びるでしょう。今年の夏の暑さなど、すでにその兆候が現れています。それでも聖書の記述はばかばかしいと言えるでしょうか。いいえ、神を無視し、知識や科学を誇る人間の方が愚かです。

●逢坂元吉郎はこう説教しています。「この死の原因はヨハネ 8 章 44 節によれば悪魔であって、すなわち悪魔は人殺しであるからです。主は「サタン、引き下がれ。あなたはわたしの邪魔をする者。神のことを思わず、人間のことを思っている。」とペトロを叱られました。もともと人は神のことを思わないで生きていけないように造られている者であって、それが神の創られた被造物の本来の姿なのです。すなわち、神が共におられるのです。しかし、神のことを思わないで平然として生きて行けるようにしたのが悪魔です。この悪魔によって騙され、われわれの中にある神の像を信じないこと、これが本当の死です。」

②【神と共に生きる世界は命である】

死が、神を必要としない生き方をすること、神に聞かない生活をするることであるなら、その反対に命とは、神と一体になって生き、神を必要とし、神に聞く生活だということが分かるでしょう。死んでいた私たちの中にキリストは息を吹き入れ、その魂を生き返らせて下さいました。それを第一の復活といいます。私の中に復活はもう始まっているのです。それは永遠の命の前払いのようなものです。そしてこの地上の肉体は一度、土に戻りますが、終わりの日には復活し、天上の朽ちない体をもらうのです。それを第二の復活といいます。人間が魂と肉体の合成物であり、死はこの両者に及んだので、復活もこの両者に及ぶのです。魂と肉体の復活です。霊魂だけでは半分です。肉体の蘇りをもって復活が完成するのです。だから信仰を抱いて死んだ者は、宗教的には死んだのではなく眠っているとされるのです。キリスト教徒の死は、死ではなく眠りに過ぎません。

●同志社の神学部に村上という先生がいました。彼は信仰が厚く、将来同志社を担う人として期待されていましたが、太平洋戦争末期に召集され、樺太で敗戦を迎えました。ソ連の捕虜となり伐採作業に従事しました。そこでの生活は悲惨で、わらの入った黒パン、湯のようなスープ、腐りかけの塩漬けニシン、それもほんの僅かでした。そのため、捕虜たちは食物を奪い合い、餓鬼のような生活を続けていました。その中で村上先生は毎朝ひげを剃り、服装をととのえ、騒がしい中で静かに聖書を読んでいました。ノルマが達成できずに、食料を減らされた人に、黙って自分の食べ物を与えました。しかし伐採の時、木の下敷きになり、かの地で召されました。引き揚げの時、仲間の人たちは自分の物は何一つ持たないで、みなで手分けして先生の遺品を奥様に届けたそうです。それは聖書、讃美歌、書物だったといえます。

村上先生のこの世での生活を思うと、報われない生涯に見えるでしょう。しかし彼はこの世にいながら、すでに神を目の前にして、永遠の世界を生きていたのです。その国で永遠の命という朽ちない報いを受けることになるでしょう。**神と共に静かにこの世を生きる人こそ、来世の生き方をこのまま鏡のようにこの世に映し出す人なのです。**神はそうように生きる人を喜んでくださいます。神と共に生き、本当の意味で生きる人となりましょう。